

予報メール

1

2

3

4

5

警報メール

1

2

3

4

5

6

7

あとがき

162

145

133

119

108

97

82

68

55

43

29

17

4

予報メー
ル

午後5時少し過ぎ——

突然の仕事の延期で佐々木悠那ゆうなは家路へ続く電車の中にいた。

その伏し目がちの表情からどことなく落ち込んでいるように見えるが、別に仕事が遅期になったのが原因ではない。

悠那は高校生ながら雑誌のモデルをかなり多くこなしているので、きつと今回のようなパターンだと延期ではなく仕事自体がキャンセルになったのだらうと薄々感じていた。だからといってこれくらいのことでは落ち込んでいない。悠那ではない。それに業界では良くあることなのでもう慣れっこになっている。

それでは何故暗い表情を見せているのだろうか？

「あゝあつ、なんであんなこと言っちゃったんだろ……いつもそう。気を付けているつもりなのになあゝ」
その愚痴の通り悠那が落ち込んでいる理由は別にあつた。

学校での会話を思い出すと自己嫌悪に陥ってしまう。今日も自分の考えとは違うことを口走ってしまった。だからと言って誰かを傷つけることを言ったわけではない、むしろ自分が傷つくようなことを言っていたのだから。

悠那のグループは、女子3人男子4人の仲のいいグループだった。休み時間や放課後なども自然と集まりいつも無駄話をしている。

高校生ともなれば性に一番興味のあるお年頃、性に関する話題も日に何度も出てきていた。男女混合のグループだというのに、女子も別段エッチな話を嫌がるわけでもなく、男の心理や性に対する考え方を知りたくて、むしろ積極的に話題に加わる程だった。

悠那も別にエッチな話が嫌なわけではない。みんなと同じように普通に話している……いや、話すようにしていた。グループの中でSEXの経験はおろか、自慰行為もしたことがないのは悠那一人だけ。経験していないことがいけないわけではないが、悠那はみんなと話を合わせるために、いつもウソをついてしまっていたのだ。しかも必要以上過激なウソを……

何故ウソをついてしまったのか。この発端は悠那がモデルをやっていることから始まる。水着のモデルをやっていたのがグループの男子に見つかり、その雑誌を学校に持ってきてみんなで話している時のことだった。水着の写真を知り合いに見られるのは赤面するくらい恥ずかしかつたのだが、悠那は必死に「水着くらいなんてことないわよ」と言う態度をとっていた。

スタイルにはある程度自信もあったし、胸も大きくウエストもキュッと締まっており、腰のラインなども男子の股間を刺激するのに十分な色気も持ち合わせている。

当然男子達は写真と見比べ、いやらしい目つきで舐めるように全身を見つめていた。

「なあゝによ。そのいやらしい目つきは」

「いやあゝ、お前こんないい躰してたんだな。今日の帰りホテルでも行くか？」

グループの中でも自称遊び人の近藤裕也がストレートな感想を言ってくる。この位の冗談など軽かわせなくてはグループではやっていけない。悠那も恥ずかしさを隠して冗談で返した。しかし、これがいけなかったらしい。

「なに言ってるのよ。あんた彼女いるでしょ」

「そうだけど、この躰見たら遊びでも抱きたくなるだろ」

「そんなの知らないわよ。裕也とエッチしてもなんの特にもならないじゃない」

「へえゝ、悠那って損得でエッチしてるんだあゝ」

「えっ」

何気なく言った言葉だったが、そんな失態を仲間が逃すはずもなく、そこからはとんでもない言われようだった。9割以上冗談なのは悠那にもわかっていたのだが、今更経験したことないと言えるわけもなく、ウソの上塗りをしたのは言うまでもない。そして今日も勢いでとんでもないことを言ってしまった。

もうグループでは悠那が出ている雑誌を探し出すのがプチブームになる始末。そして、また水着の写真が載っている雑誌を見つけ出されてしまい、いつも通りからかわれる対象となってしまう。からかわれるのが嫌なわけではない。別段悪意のあるイジメではないのだから気にするようなことじゃない。それは犯罪なのではないかと言うきわどいことを言われても、本当に実行しようとする者は一人もいなかったし、冗談なのはわかっていたので、悠那も言わなくていいことを口走ってしまったのだ。

「悠那あゝ、ホント一度でいいから相手してくれよ。嫌だって言うところの写真をオカズにオナニーしちゃうぞ」
「いいわよおゝ、頭の中でなら遠慮なく私のこと犯してくれても。どうぞオナベツトにして下さい。うれしいなあゝ、私のこと見てそんなに興奮してくれるんだ。なんなら裕也がオナニーする時間教えてくれれば、その時間に会わせて私もオナニーしてあげてもいいわよ」

なんてことを言えば大うけだった。大うけだったのも確かだが、そんなことばっかり言っているので経験豊富と見られてしまうのも仕方がない。しかも芸能の仕事をやっているのだからイメージにピツタリといった感じだ。

性に興味がないと言えばウソになるが、別にそんなに急いでSEXを経験しようとも考えてもいない、それどころかオナニーすら進んでしようとは考えていなかった。

——はああ……これじゃあ遊び人になっちゃうよ。それに、みんな私にエッチの相談してくるし……せめてオナニーくらい経験しといた方がいいのかなあ……みんなの話聞いとると気持ちいいって言うもんなあ……で

も、気持ちいいってどんな感じなんだろ？

自己嫌悪に陥るたびに考えること。今日こそはオナニーをしてみよう！ そう決心するのだが、実際夜になってみるとそんなことはすっかり忘れて眠りについてしまう。覚えていたとしても全くエッチな気分になってないので、結局行動に移すことなく眠りについてしまうのだった。

こうして悠那を暗くしている原因、ようは自分自身が巻いた種だったのである。

「はあ……もう気にするのよそう。これから気を付ければいいよ」

まだ完全に気分が晴れたわけではないが気にしていても仕方がない。悠那はもたれ掛かるようにして扉に寄りかかった。電車の揺れを感じながら流れる風景をほんやりと見つめていた時、携帯電話が鳴る。

聞き慣れない着信メロディーから登録のされていない人からのメールだとわかる。

——誰だろう……またイタズラかな。

スカートのポケットに入れてある携帯電話を取り出しメールを開く。その一連の動きはスムーズで、まさに流れるような動きだった。そしてメールタイトルを見た時、悠那の表情が少し変わる。

「何これ？」

画面には不思議なタイトルの付いたメールが表示されていた。そのメールのタイトルは〈予報メール〉、当然アドレスにも見覚えがないのでイタズラなのは間違いないだろう。いくらメールアドレスを変えようと迷惑メールは送られてくるので、いい加減うんざりしてしまう。普段なら中身など開かず直ぐに削除してしまうのだが、なんだかこのメールは気になった。「予報」と打たれたタイトルが気になったのかも知れない。悠那はなんとなくそのメールを開いてしまうのだった。

——何これ？ やっぱりイタズラだ。

なんの意味があつてこんな悪戯メールを送ってくるのだろう。こんなメールを見ていると「世の中には暇な

人がいるんだなあ」と本当に思う。

そんなことを思いながら一つ溜息をつくともメールを読み進めた。

〈予報メール…

電車を降りて帰り道を歩いている時突風が吹くでしょう。スカートが捲れあがるのには十分お気を付け下さい〉

こんな訳のわからない内容なのだから、誰しも悪戯メールと違って当然だ。悠那は本当に呆れると言った溜息をつきながらメールを削除すると夕焼けに赤く染まる街並みへ視線を移すのだった。

電車は流れるようにプラットフォームへ滑り込み、軽い振動と共に停車すると空気の抜けるような音と共に扉が左右に割れた。帰宅時間と言うこともあり多くの人が電車から吐き出されてくる。悠那もその流れに乗って改札へと歩みを進めた。住宅街に隣接する駅なので、この時間帯は帰宅するサラリーマンや学生、買い物帰りの親子連れなどで賑わっている。

そんな人混みに紛れていると悪戯メールのことなどすっかり忘れ、なにも考えず駅の階段を下りていた時のことだった。なんの前触れもなく突然強風が悠那に襲いかかったのは……

「きゃっ」

慌ててスカートを押さえた時には遅かった。なんとか前は間に合ったが、後ろまで手を回す余裕などなく、スカートは大きく捲れあがってしまっていた。

スカートを押さえ立ち止まっている悠那の横を薄笑いを浮かべながら通り過ぎる若いサラリーマンが目に入る。きつとこのサラリーマンの他にも多くの人に見られてしまったことだろう。今日は撮影が予定されていたので周りを意識し可愛らしいパンティーを履いていたのだが、別に男に見せるために履いてきているわけではない、どちらかと言えば同性を意識していたので、男に見られるとは思ってもいなかったのもいけなかったのかも知れない、なんだかも凄く恥ずかしくなってしまった。

悠那は顔を真っ赤にして俯くと突然走り出してしまふ。恥ずかしさのあまり居ても立っても居られずその場を逃げ出すことしかできなかったのだ。

いったいどのくらい走っただろうか？ 少し走れば住宅街に入ってしまうので一本大通りを抜けただけで駅前とは違い人通りは極端に少なくなり、そして人通りが完全に途切れたところで速度を緩めた悠那はようやく一息ついたのだった。

学校での発言とは違い本当は純情な悠那であった。これが本来の悠那の姿なのだろう。本当ならモデルなどやれるような勇氣など持ち合わせていない。中学の時も引つ込み思案で体操服を着るのでさえ恥ずかしく、夏場でも極力ジャージを着る始末。これではいけないとずっと思っていたのに、なかなか性格を変えることはできなかったが、運良く中学を卒業すると同時に父親の転勤で東京に来ることとなった。昔の悠那を知る人はいない新天地で、悠那は一生懸命頑張り「明るい悠那」を作り上げて来たのだった。モデル事務所に入ったのもそんな自分を変えたかったから。それがピツタリ悠那にはまっただけのこと、表面上だけで付き合う芸能の仕事、同じモデルとは滅多に会うことはない。悠那は今までの自分を隠し、思いつきり背伸びしたキャラクターを作り上げていった。こんなことを一年以上続けていけば性格もかなり明るくなり、今ではこちらが本物の悠那になったのではと錯覚を起す程だった。しかし、深い部分では昔の悠那が残っている。「恥ずかしがり屋の悠那」が……今もスカートが捲れあがっただけのことで顔を真っ赤にしている。これが友達が側にいれば「明

るい悠那」を演じきり、気にすることもなかったのだろうが、一人になってしまふと恥ずかしさが我慢できなくなってしまう。

「もうっ！ ダメだよ。こんなんじゃダメ……このくらい平気だもん」

両手で頬を軽く叩き自分自身を奮い立たせるように言い聞かせる。学校ではあれだけ大胆なことを言っても大丈夫なのに、たかだかスカートが捲れたくらいのことでも悠那は少し震えている。この「恥ずかしがり屋の悠那」が性を拒んでいるのかも知れない。しかし、こんなことではいけないと悠那はわざと声に出して自分に言い聞かせた。

「そうだよ。こんなの大丈夫、全然平気。急に風なんて吹くのがいけないんだよ」

その時、先程送られてきたメールのことを思い出した。あの悪戯メール〈予報メール〉のことを……

「そう言えばさっきのメールにそんなこと書いてあったっけ。あれって本当のことだったのかな？ あはは、そんなことあり得るわけないか」

そう軽く笑い飛ばしても少しだけ背筋が寒くなるのを感じた。さっき届いた〈予報メール〉に書かれていた通りのことが実際に起こったのだ。まさかと言う気持ちともしかしたらと言う気持ちがせめぎ合っている。

いったい誰がこんなメールを送ってきたのだろう。だが確認しようにもメールは既に消してしまった。確認することもできないので、なんだかモヤモヤした気持ちになったが、悠那はメールのことを極力忘れることにした。

しかし、この日を境に〈予報メール〉は、毎日送られてくるようになるうとは、今の悠那には予想することもできなかつた。

* * *

訳のわからないメールが届くようになって一週間が過ぎた。

どこから送られてくるのかわからないメール……しかし悠那は、このメールをさほど迷惑とは思っていなかった。

なぜこのような考えになったのだろうか？

確かに始めは書かれていることが次々と現実になっていくので薄気味悪く恐ろしくもあったが、冷静に考えてみるとメールに書かれていることは予報と書かれた予知。初めは信じられなかったが、メールを信じるのであれば書かれていることさえ気を付ければいい。今日だってメールのおかげで前もって準備ができたくらいだ。今回届いたメールにはこう書かれていた。

〈予報メール…

今日は雨も降っていないのにびしょ濡れになるでしょう。ワイシャツがスケスケになりブラジャーも丸見え、男の子達の注目の的になるので注意しましょう。〉

確か天気予報では今日一日晴れマークが付いていたはず。きつとなんらかの水難に遭うことを予知しているのだろう。いつもはワイシャツの下にインナーなど着ないのだが、今日は用心してインナーを着た上、換えの下着とワイシャツまで持った。

そしてメールの予報は今日もズバリ的中することとなる。

放課後になり、もうなにもないかと安心していただけだが、それはゴミを収集場所に運んでいた時に起こった。別のクラスの男子生徒がホースで遊んでおり、不注意かわざとかはわからないが、悠那のことをびしょ濡れに

してしまったのだ。この時ゴミ箱を持っていたのでインナーを着ていなかったら本当に下着を見られ男子生徒の注目の的になってしまっただろう。だが、この惨事もメールのおかげで死守することができた。

一緒にいた女生徒はムキになって男子生徒にくっつくかかかっていたが、こうなることがなんとなくわかっていて悠那は怒る気にもなれず、むしろくっつかかかっていた女生徒を止める始末だった。

その余裕をどう思ったのか、女生徒は感心した様子で悠那のを見ている。

「悠那は凄いよ。もしインナー着てなかったらブラ丸見えだったじゃない」

「いいよそんなこと。今日は暑かったから涼しくなって丁度良かったし、下着ぐらい見られたってどってことないでしょ」

「そっかなあ〜？ 私なんて未だに彼氏とエッチする時恥ずかしくてさあ〜。でも、彼ったら電気付けたまましようとするんだよ。暗くなると見えなくなるからって、だからもう恥ずかしくて。ねえ、悠那はどんなエッチするの？ 電気付けられてでも大丈夫？ って悠那は大丈夫だよ。いいよなあ〜悠那は、可愛いしスタイルだって凄くいいし、私も悠那くらいスタイル良かったら明るいところだって、誰かに見られてたってエッチできちゃうんだけどなあ」

「そんなことないよ。私だって恥ずかしいことあるし、でも大体のことは大丈夫かな。だって大胆にすると男ってすっごく喜ぶでしょ。そうなったら後は思うがままじゃない」

「知らないことを言っているとは思っても、「明るい悠那」を演じている時はウソがポンポン出てきてしまう。特にエッチに関することは、ネットや雑誌に書かれていたことを参考にしていたのでかなりきわどいことも言ってしまったている。そのことが悠那を寄り一層「大胆な女の子」と勘違いさせることになるのだが今更止めることはできないだろう。」

そう考えると〈予報メール〉は本当に役に立つ。今回のことにしても、もしなにも知らずに起こったら、きつ

と醜態をさらしていたことだろう。もしかすると今までのウソがばれて友達から相手にされなくなっていたかも知れない。そう考えるとどこから送られてくるかなど気にする必要などない。これはきつと神様から送られてくるお告げなのだ。悠那は都合のいいように考えているのだった。

* * *

悠那はこのメールのおかげでなんとかウソがばれずにすんでいた。だが撮影に行つた時、不思議なことを聞かれる。

その日は冬の新作ファッションの撮影で一日がかりの仕事だった。撮影自体は順調に進み滞りなく終了したのだが、ポロツとこの〈予報メール〉の話をしてしまったのだ。現場で会う女の子とは学校も違うので、クラスメイトにはばれないと安心して話したのもあつた。それに話したのは撮影で何度か一緒になつたことのある安達夕貴という女の子、年も同じと言うこともあり、珍しくメールのやりとりもする程の友達だったので、ついつい話してしまつたのだ。

それは撮影も終わり控え室で着替えをしている時の何気ない会話から始まる。

「なんだか楽しそうだね」

「そうかなあ、へへへ」

「あくなにその変な笑い方。彼氏でもできた？」

「うん……それよりも夕貴の方はどうなのよ。小笠原君とはうまくいつてるの？」

「そりゃうまくいつてるよ……って、違うでしょ、今は悠那のことを聞いてるんだから」

「あはは、彼氏とかじゃないんだけど最近いいことって言うのかなあ……ちよつと難しいけどなんだか安心して

きるといふか、そんなことがあってね」

気分的には楽になつてゐるのだが、別に嬉しいことと言う程でもない。それなのに何故か唇がほころんでしまふ。

「なにその中途半端な言い方は、ちゃんと教えてよ」

「どうしようかなあ……でも夕貴にならないかな。うんとね、これは誰にも言つてないんだけど最近不思議なメールが届くようになったの」

「えっ、不思議なメール……」

〈不思議なメール〉と言う言葉に夕貴の顔が反応した。しかし、そんなことに悠那は全く気付いた様子もなく話し続ける。

「うん。『予報メール』つて言うんだけど未来を予知してくれるメールなの……あれ、どうしたの？ あつ、信用してないでしょ」

「……ううん。そうじゃない……信用してるよ。それよりも悠那」

「なに？」

「そのメール気を付けた方がいいよ」

「えっ、どうして？」

笑顔をなくし夕貴が真剣な顔で悠那のことを見つめる。その視線の意味が悠那にはわからない。

「だって……」

そう言つたまま夕貴は黙り込んでしまった。夕貴の瞳がなにかを訴えようとしているのだが、悠那にはそれを読み取ることができない。

「どうしたの？ 大丈夫？」

なにかを言いかけて言葉に詰まらせた顔を心配そうに悠那が覗き込む。そのなにも知らない無垢な瞳に夕貴はその場を誤魔化すように言葉を繋げた。

「だって、どこから来てるのかわからないメールなんでしょ。イタズラかも知れないし、もしかしたらストーカーかも知れないじゃない。だから気を付けた方がいいかなあ〜って思ったの」

「なんだ、そんなこと心配してくれたの。大丈夫だよ。これは私にしか来ない神様からのメールだもん」
その屈託のない笑顔に夕貴は直ぐに言葉を返すことができなかった。夕貴も始めはそう思っていた。いや、最後の指示が来るまでほとんど疑っていなかったと言ってもいい。しかも、あの悪魔のようなメールが、こんな近くをうろついていたとは思っても寄らなかつた。もしかすると夕貴がアドレスを覚えてしまった(黒川ゆあ)から回ってきたのだろうか、それとも何人も経由して悠那の元にたどり着いたのかはわからない。もしかしたらこれは夕貴の受け取っていたメールとは別物なのかも知れない。夕貴はただそうであることを願うことしかできなかった。

「そう……あつ、もうこんな時間、ちょっと家の用事があるから先に帰るね。お疲れ様、また今度連絡するよ」
「うん、わかつた。お疲れ様。またね」

慌てて控え室を後にする夕貴の後ろ姿を不思議そうな顔をして悠那は見送る。夕貴の言葉が気にならないと言ったら嘘になるが、都合のいいように考えている悠那は、夕貴の言葉を心に留めることができなかった。

「夕貴ったらどうしちゃったんだろ？ メールに心当たりでもあったのかな？ もしかして昔は夕貴のところはこのメールが届いていたりして……ってそんなわけないよね。さあ私も帰ろう」

鞆を手にして扉を開こうとした時、携帯電話が鳴った。このメモディーはあのメールだ。最近ではわかりやすいように(予報メール)にもメロディーを付けていた。しかも、悠那のお気に入りの曲を……それ程悠那はこの(予報メール)を受け入れているのだった。

「今日はもう帰るだけなのに、なにがあるんだろ……でも、こないだも帰りになにかあったんだっけ。気を付けなくちゃいけないことがあるんだねきつと」

しかし、届いたメールは悠那が思っているような内容とは違っていた。

〈注意報メール…

このメールのことを人に言うのは止めましょう。もし今度人にしゃべったら〈予報メール〉は打ち切らせて頂きます〉

「えっ！ なにこれ？ 言っちゃいけなかつたんだ。そんなの知らなかつたよ」

今の会話をどこで聞いていたのかなどと言う疑問など浮かばなかつた。ただ〈予報メール〉が打ち切られてしまうかも知れないことに驚いていた。悠那は慌てて返信ボタンを押すとメールを制作する。考えてみたら返信をするのは初めてのこと、なにより今まで送り返そうなどと考えたこともなかつた。

あつと言う間に文章を打ち込み内容を確認する。

《ゴメンナサイ。言っちゃいけないとは知りませんでした。もう誰にも言わないから許して下さい》

「これでいいよね」

文章を確認して送信ボタンを押し、紙飛行機が飛んでいく絵をジッと見つめる。そして「送信完了」の文字を確認して携帯電話を閉じた瞬間メールが届いた。それは当然〈予報メール〉。いくらなんでも早すぎると驚いたが、悠那は慌ててメールを開き中を確認した。

へわかりました。今回はこちらにも注意を与えていなかったもので、この後もメールは送信させて頂きます。それでは、これからもよろしくお願いします。以後なるべくメールは返信しないようにして下さい

と書かれていた。

「はああ……良かった」

悠那はなぜかホッと胸をなで下ろしていた。

しかし、安堵の笑みを浮かべる悠那は真実を知らなかった。

この誰が送るとも知れないメールが、不幸への道しるべになっていると言うことに……